

「初等国語科教育法」の検討

国語科教育講座 中西 淳

授業の概要

本授業は、初等における国語科の授業理論の理解を深めていくところにある。

授業は、以下の構成により、講義形式とワークショップ形式を用いて展開した。

- (1) 国語科教育について
- (2) 国語科教育の目標と内容
- (3) 国語科授業論
- (4) 国語科学習指導論
 - 話すこと・聞くことの学習指導
 - 書くことの学習指導
 - 読むことの学習指導 説明的文章
 - 読むことの学習指導 文学的文章
 - 言語事項の学習指導
- (5) まとめ

授業上の工夫点

以下、授業の工夫点について述べる。

- (1) 具体的実践例の紹介
国語科教育の理論と実践との結びつきを理解させるために、多くの実践例を紹介した。また、「話すこと・聞くことの学習指導」においては、小学校の授業を記録したビデオを活用した。
- (2) ワークショップ形式と講義形式の関連づけ
本授業は、内容理解を図るため、従来から講義形式にワークショップ形式を組み込みでいる。本年度は、以下の二点から授業を立体的に組織した。
 - 「国語科教育の目標と内容」の中におけるそれらの形式の関連づけを図る
 - 「国語科教育の目標と内容」と「国語科学習指導論 話すこと・聞くことの学習指導」との関連づけを図る具体的には以下の通りである。
< 国語科教育の目標と内容・1コマ目 > ...
ワークショップ形式
自分達が、指導要領における国語科の「目標」をつくるとすると、どのような案にするのか、それをグループで考えさ

せる。

その案をグループごとにOHPを使って発表させる。

発表ごとに議論させる。

最後に、「自分たちが行った話し合い活動を振り返りながら、その活動に必要な力を考えよ」というテーマでレポートを作成させた。「話すこと・聞くことの学習指導」の素地作りである。

< 国語科教育の目標と内容・2コマ目 > ...
講義形式

教育関係法規を概説し、学習指導要領がどのように位置付いているかを確認させる。

国語科学習指導要領における国語科の目標や内容を具体的に説明する。

< 話すこと・聞くことの学習指導 >

先のレポートとワークショップでの話し合い活動を踏まえながら、そこにおいて必要とされる力とは何か、それを育成するための指導法にはどのようなものがあるのかについて説明した。

(3) 授業実践の提示

「書くことの学習指導」においては、小学校の教科書教材を用いて具体的にどのような授業が構想できるのか、実際に授業の一端を示してみせた。さらに、その指導はどのような作文力を育成することになるのか考えさせた。以下はその展開である。

題名のついていない小学生の作文教材を読ませる。

どのような題名をつけるとよいのか考えさせる。

班を作り、それについて検討させ、その結果を発表させる。

それぞれの班の題名のつけ方がどのような観点からなされていたか整理し、それにコメントを加える。

この学習は、どのような力を育成することになっているのか考えさせる。

アンケートの分析

授業に関するアンケート調査を行った。その内容は、授業に活動（ワークショップ形式）を取り入れることについてどう思うか、国語科教育についてもっと知りたいことは何かというものである。

授業に活動を入れることについて、ほとんどの学生が肯定的に捉えている。その理由は以下のように分類できる。

新たな考えが浮かぶ

「活動は、他の人の意見を聞きながら自分の考えをさらに考えていくことができたので良かったです。自分ひとりでは思い浮かばなかったことや、考えになかったことを他の人から聞けると新たな考えに結び付くことができました。」

「今回、話し合い活動やワークをまじえた授業を行っていただきましたが、私は最初、全く話したことの無い人たちと自分の専門外の話をするのが嫌でした。しかし、いざ言葉を交わしてみると、自分と異なる新しい発想や、自分らしいスタイルを持った様々なプレゼン力に出会い、私自身勉強するものをたくさん得られたと思います。ぜひ来年度も行ってほしいです。」

授業態度が変わる

「グループ活動を何回か取り入れ、理解を深めようとしたことについては、比較的肯定的に考えている。というのはただ聞いているだけでは、単調な講義になりうる可能性が高いと私を含め学生を見ていて思うからである。やはり受け身な人が多いのが現状で、このような概論的授業に対する興味・関心度はバラツキがあり、低いと思われるからです。」

「ずっときいて考える授業より活動があった方が楽しいし記憶に残ると思います。なので時間の許す限り、活動をしてください。」

問題意識が生まれる

「概論の間に活動があることで、問題意識をもって聞けました。概論ばかりだと、実際の場面を想像しにくいので...。」

表現力が養える

「活動を入れることは、自分たちのためになる良いものだったと思う。答えがないものを自分で考えるだけでなく、

それを文章にすることで、そして小グループで他人と意見を共有することで、自分の表現能力の未熟さを感じることができた。」

子どもの視点に立つことができる

「能動的な活動が授業の中にあることによって考えようとする姿勢を持つことができたと思う。また子どもたちの視点に立つことにも役だったと思う。」

考えを深めることができる

「活動があったことによって、自分の国語への考え方、物事のとらえ方を見つめ直すことができ、より考えを深めることができたと思います。また、話し合い等によって他の人の意見を聞いたことで視野を広げることもできたと感じました。」

「活動は理解を深めるためにもやって良かったと思います。」

肯定的でない意見としては「活動があること自体はよいが、実際役に立ったのか理解が深まったのかどうかは正直わからない。」というものが見られた。

また、もっと知りたいと思うことについては、「教材選びの視点」「コミュニケーション能力について」「初等国語の現状と課題」などがあがっていた。また、「授業のビデオを見たときがありました。それがとても参考になったので、もう少し授業の実践例を紹介してほしいです。」という意見も見られた。

まとめ

以下、授業形式と教材の観点から来年度の課題を述べる。

授業形式について

来年度もワークショップ形式を継続するつもりである。ただし本授業は概論である。そのため時間的制約が大きく、すべての授業にワークショップ形式を取り入れるわけにはいかない。講義形式とワークショップ形式をいかに組み合わせるかが今後の課題といえよう。

教材について

「話すこと・聞くこと」だけではなく、他の分野におけるビデオ教材も用いる必要があると思われる。